

月刊ウィーン

現地オリジナル取材と編集で
ウィーンを伝える月刊情報紙
おかげさまで今年は 創刊 25 年目
創刊 1989 年 No.284

GEKKAN-WIEN 2013年2月号





杉本純の原子力の話 II ウィーンと京都 17



やや旧聞に属するが、昨年九月十九日〜二日に日本原子力学会秋の大会が広島大学で開催された。福島第二原子力発電所事故(福島事故)後の学会としては、昨年三月に福井大学で開催された春の年会に続く三回目であった。学会

では一般研究発表とは別に、テーマ毎にセッションが設けられる。今回は、福島事故関連の公開セッションが十二あり、それ以外の総合講演・合同セッションなど十八のセッションでも八つが福島事故関連であった。春の年会



研究機関等による福島事故に関連したユニークな取組みが七件紹介され、活発な討論が行われた。教育や人材育成に限らず、今後の学会における取組みもほとんどが福島事故を中心に展開されるだろうことは確かである。

さて、今月はウィーンと京都の類似点として、年末年始の風物詩について述べてみたい。ウィーン・フィルによるニューイヤークコンサートは、NHKを始め世界各国にライブ中継される世界的にも有名な風物詩であり、既に七四年の歴史がある。二〇〇二年には小澤征爾が指揮者となり、「美しく青きドナウ」の冒頭、楽員に縁のある国の言葉で新年

西の名優が顔を合わせ、名舞台を重ねてきた。昨年の顔見世は、六代目中村勘九郎の襲名披露と重なったため、特に人気が高まった。顔見世最中の十二月五日、勘九郎の父親である勘三郎が亡くなったことは本当に残念なことだ。両市の年末年始の風物詩は、歴史と伝統、それに高い品質に支えられていると言えよう。

余談であるが、筆者がウィーン赴任中の二〇〇六年十一月三〇日、友人が切符を入手してズービン・メータ指揮の大晦日コンサートを聴く幸運に恵まれた。次の日の地元新聞にウィーン・フィルの楽員と一緒の私の写真が小さく掲載された。また、昨年の十二月一日、大学の歌舞伎鑑賞助成に当選して、家内と一緒に顔見世を堪能する機会があった。

学生時代は縁がなく、座席は初めてだった。総勢十六名の役者による華やかな口上も楽しめた。こうした幸運に感謝しつつ、ニューイヤークコンサートが開催される楽友協会のスケッチを掲載させて頂く。

では、アジア諸国への原子力人材育成自立支援、原子力発電所の地震・津波対策を分かり易く説明するためのパソコン上の原子炉シミュレータ、高校・大学への科学教育を通じた原子力コミュニケーション、小中学生を対象とした放射線原子力防災出張授業など、大学や

役軍人のため、三日は大晦日コンサートとして演奏されている。二万、京都では六〇三年の出雲阿国による歌舞伎発祥の地として、我が国最古の歴史に伝統を持つ劇場である南座において、年末に行われる吉例顔見世興行が風物詩となっている。江戸時代から三百余年の歴史があり、大正期以降は東

■ 杉本純 京都大学教授／元原子力機構ウィーン事務所長 ■

